身延入山当初の日蓮聖人

上田本昌

一　序言

宗祖は文永十一年（一二七四）の五月十七日に、身延山へ到着された。爾来、星霜流れ去って、本年は開闢七〇〇年に相当する。そこでこれを機に、身延山における宗祖の動静について、その一端を祖書の上から考察してみようとするものである。

古来、幾多の先師によって、〈身延入山の聖意〉或いは〈目的〉等については、種々に語られて来ているところであるが、在山中の一貫した動静については、あまり多くは記されておらず、わずかに部分的な記述が見られる程度である。たとえば在山中における波木井氏との交渉や、弟子檀越に宛て出された御消息類の数、又は御供養を受けた品々について、或いは〈身延霊山説〉の推移などについての考察が挙げられよう。

爰ではそうした事柄をも含めて、入山直後から在山中の動静につき、祖書の上から年を追って、その動静を考察してみようとするものである。即ち、「身延山における日蓮聖人」を、できるだけ忠実に浮き彫りしてみようと考えているが、しかしそのためには、時間と紙数の余裕が、相当に要するものであり、今は入山直後における動静を記すに

とどまるをえないことと思うので、足らざるは後日を期すことにしたい。

二　入山の当初（文永十一年）

身延入山の直後、五月十七日に富木殿に宛て記された御消息文によると、鎌倉を発って十二日に酒輪、十三日に竹ノ下、十四日に車返、十五日に大宮を経て、十六日には南部、そして十七日に身延へ到着したことが記されている。そして、

「㋐いまださだまらずといえども、大いし（大旨）はこの山中心中に叶て候へば、しばらくは候はんずらむ。㋑結句は一人になって日本国に流浪すべきみ（身）にて候。又たちとどまるみ（身）ならばけんさん（見参）に入候べし。恐々謹言。①」

と述べている。㋐の文はまだ入山の当初なので決定的ではないが、身延山が心中に叶った処なので、しばらくの間は、この山にとどまることを明らかにしている。入山第一日目の卒直な心境を表したものであろうが、「心中に叶て」と云う点に、特に注目すべきであろう。「いまださだまらずといえども」と云いながらも、心中に叶った山として、入山の当初からすでに、この山に対する心情の深かったことを窺うことができる。

㋑の文は、わずかの弟子を従えて、ひっそりと入山された心境、孤独感にみちたものである。又この御書は「追書」に、

「㋒けかち（飢渇）申すばかりなし。米一合もうらず。がし（餓死）しぬべし。此御房たちもみなかへして但一人候べし。このよしを御房たちにもかたりさせ給へ。」

と記している。同行の弟子をみな帰して、ただ一人この山に残るということは、一世の聖者と仰がれる人の、測りしれない心境の一面を物語っているようにも考えられる。㋐の文からすると、身延入山の道中は、必ずしも安易なものではなく、むしろ苦痛の旅であって、入山の当初は「但一人」だけでも、生活は難渋を極めたものであったろうと推察できる。この㋐の文から塩田義遜教授は、宗祖が身延へ入山されることになったのは「突然決せられたもの」とし、地頭の波木井氏に対する事前の入山予告はなかったものと推論している。[2] たしかに、こうした祖文の上からすると、当初は、大自然の静閑な中に、三昧を但一人得ようとされていたように受けとめられる。松木本興教授によるとこの入山の意志は、『祈禱経送状』（昭定六八九）や、『高橋入道殿御返事』（昭定一〇八八）等の祖書から、すでに佐渡在島中に、いずれかの山中へ籠ることが、考えられていたものとしている。更に「最後の諫暁にやぶれ、敗北感を背負って入山された」とする説もあるが、これは皮相な考えであり、宗祖一代の化導における正宗分から、流通分に至る〈結前生後〉のための契機となったものであると主張している。[3]

㋐の文から推すとき、塩田説は至って妥当の如くに感じられるし、又㋑㋒の両文から推すと、松木説も至当なものとして受けとることができよう。尚、入山二カ月後の七月二十六日に記された『上野殿御返事』によると、入山後の様子が次のように語られている。

「㋓今年のけかち（飢渇）に、はじめたる山中に、木のもとに、このはうちしきたるやうなるすみか、をもひやらせ給へ。[4]」

〈けかち〉については㋐の文と同様で、当時の飢渇の状態は、想像以上に深刻な社会問題であったろうと推測できる。「米一合も売らず。餓死しぬべし。」と云う近辺の人々の生活は、あたかも『立正安国論』当時の「牛馬斃レ

巷骸骨充レ路、招レ死之輩既超二大半一」と云う状況に、相通ずるものがあったと考えられる。初めて入山された当初の粗末な草庵での生活は、衣・食・住共に、貧困を極めた状態であり、山中樹下の日々は、かろうじて生命を保つに足りうる程度であったようである。

宗祖は五月十七日に波木井氏の館に到着され、西谷の庵室に入られるまで、ちょうど一カ月間、近隣の遊化に過ごされた。この時に小室の菩知法印、下山の法喜阿闍梨及び石和の鵜飼漁翁等が、その教化に浴している。わずか一カ月間で、西谷を開き庵室を建立するに至っているのであるから、いかに労力をついやしたとしても、現今と異り至って簡素なものでしかなかったであろう。まして飢饉の時であれば尚更堂宇の建立には難渋したことであろう。

六月十七日に西谷へ入られてからは、弘安五年の秋に至るまで、庵室に籠られたまま、一歩も山を下らず、他出されるようなことはされていない。建治二年に旧師道善房遷化の報に接した時も、遂に山を下らず、代りに『報恩鈔』二巻を著し、佐渡阿闍梨日向師を代理として、清澄山に向わしめている程である。ただ西谷から身延の嶺（現在の奥之院思親閣）へは、しばしば登られ遙かに東の方、生国安房を拝し、両親並に旧師の菩提を弔われ、又立正安国の祈念をされているが、このことの外は、西谷の庵室に専ら籠られて、ひたすら静寂の境界に接しておられたようである。

ところで入山の後、最初に宗義に関する著作をされたのは、五月二十四日に記されたとする『法華取要抄』である。この祖書については、既に本誌において、筆者がいささか考究するところを述べているので、⑤詳細は省略するが佐渡期から身延期へ移られる過渡期の祖書として、特に注目すべきものと云えよう。構想は恐らく在島中に立てられ入山の後、執筆されたものと考えられる。「問云、如来滅後二千余年竜樹・天親・天台・伝教所レ残秘法何物乎、答

曰、本門本尊与二戒壇一与二題目五字一也。⑥」とあって、祖書で〈三大秘法〉の名目を最初に、完全な三秘各別の形をとって顕されたものとされている。〈佐渡から身延へ〉の思想的展開を知る上に重要な一書といえよう。

五月から六月にかけて記された祖書に、『聖密房御書』と『別当御房御返事』とがある。聖密房と云うのは清澄寺の住僧のことであり、別当とは同じく清澄寺の別当を指したものであると云われている。しかし、聖密房についての詳細は不明であり、述作年時についても、「境明庵目録」では文永十年五月在島中とし、「高祖年譜」では建治三年説をとっているが、ここでは鈴木一成教授の文永十一年説によった。〈真言破〉が主眼であり、身延期における折伏の対象が、真言・天台の二宗に及んで来ていることを示す一書と云えよう。

宗祖の折伏は、佐前の鎌倉期は『立正安国論』によって代表される如く、その中心は〈浄土念仏破〉であったが、佐渡期から身延期に入ると、教義の複雑な真言や、宗祖の教学と密接な関係にある天台に至る折伏が、その中心となっており、折伏にも推移展開のあったことを知ることができるが、この御書は身延期における真言破の初めてのものとして、特に注目されるものと云える。『別当御房御返事』には有名な「日蓮は閻浮提第一の法華経の行者なり。」の一文がある。既に『開目鈔』において〈人開顕〉されたとは云え、やはり身延へ入って、閻浮第一の法華経の行者たる宣示が明確に記されている点に、大きな意義を感じさせるものがある。尚この一文の前に「日本国の山寺の主ともなるべし。⑦」と云う興味深い一文がある。

八月には六日付で『異体同心事』が大田氏宛に出されている。「白小袖一つ、あつわたの小袖、はわき（伯耆）房のびんぎに鵞目一貫、竝びにうけ給はる。はわき房さど（佐渡）房等の事、あつわら（熱原）の者どもの御心ざし。異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事叶ふ事なし⑧」とあり、宗祖の身延入山を聞き、更に前掲㋒や㋓の文

に示されているような苦難の現況を知った信徒から、次第に送り物が届けられて行った。在山九カ年間における送り物の種類は、衣類・食糧・鵞目等広範囲にわたり、数も相当多く祖書の中に記述されている。[9]

また爰では、「熱原の者どもの御心ざし」とあるが、後年「熱原法難」の際に活躍した神四郎兄弟を中心とする人々のことを指しているものと考えられうる。この兄弟の他に、入山後、駿州・甲州の両地方において、入信する僧俗が次第に増えて行った。最初は㋐の文が示す通り、随身の弟子もみな帰して、「但一人」での窮乏生活で始ったのであるが、後に弘安年間に入ると、常時僧俗が宗祖の膝下に集って、常随給仕し、その教化に浴していた。少ない時でも四十人から六十人、多い時には百人を越す人々の居住があった程である。[10]

九月には十七日付で、『弥源太入道殿御返事』と、二十六日付の四条氏宛書簡とがある。弥源太入道に対しては、「御音信も候はねば何にと思ひて候つるに、御使うれしく候。御所労の御平癒の由うれしく候、うれしく候。」[11]と病に伏せっていた入道の身の上を案じ、その平癒を倶に悦び合っている心情がよく表されている。身延における宗祖はいつも弟子や信徒に対して、思いやりの心を配り、不幸に会った者に対しては、倶に涙を流して、その悲しみを慰めわかち合い、又悦こばしいことについては、倶に悦こび合っている。御消息文の端々から、そうした宗祖の人間味溢るる慈愛の情が窺えるのである。[12]

四条氏に対しては、「一国こぞりて日蓮をかへりてせむ。上一人より下万民にいたるまで、皆五逆に過ぎたる謗法の人となりぬ。」[13]と述べて、国主が諫暁を聞き入れず、かえって迫害を加え、国中が謗法の徒と化してしまったことを嘆き、更に四条氏がその主君に対して、法華の信仰を勧めたことを高く評価し、「殿の御失は脱れ給ひぬ。」と与同罪からのがれたことを悦び、今後は「かまへてかまへて御用心候べし。いよいよにくむ人人ねら(狙)ひ候らん。」

と注意を与え、酒宴についても「夜は一切止め、昼であっても油断するべからず。」と、細い点に至るまで配慮されている。身延の山中に在っても、常に門下の動静に対し、細心の注意がくばられていた一つの現れとして、受けとることができよう。

十一月に入ると、富士の上野の南条殿から、清酒や柑子を始めとして、榎若・薯蕷・牛房等の野菜類に至るまで、種々の品々が送られて来た。この御礼状が早速記されたが、その中に

「㋔抑も日蓮は日本国をたすけんとふかくおもへども、日本国の上下万人一同に、国のほろぶべきゆへにや、用ひられざる上、度々あだをなさるれば、力をよばず山林にまじはり候ぬ。⑭」

と入山の心境を、消極的ながら漏らしている。佐渡三年間の寒苦を経て、身延に入山し、ここで又前記㋒や㋓の文にある通り、飢渇との斗いをしておられる宗祖にとっては、こうした「力をよばず」と云った消極的一面を、飾り気なく吐露されるに至ったものと考えられる。これは後の⑦と建治二年三月に南条氏宛に発信された文と同種のものとして扱うことができよう。

同じく十一月中の祖書に、曾谷入道に宛た二十日付の書簡と、十一月頃の執筆と思われている『合戦在眼前御書』(断片)とが伝っている。

十二月には、『顕立正意抄』が十五日付で記されている。これは先きに幕府へ提出した『立正安国論』の中で予言した他国侵逼と自界叛逆の二難について、更に重記し、末文において、「我弟子等之中にも信心薄淡者は臨終之時可レ現三阿鼻獄之相一。其時不レ可レ恨レ我等云云」⑯と述べ、門下の信心堅固たるべきことを強調している。この頃は大蒙古国が、非常な勢力を持ち、日本列島を狙っていた。すでに壱岐・対島は、蒙古の軍船によっておびやかされてい

た。いつ本土へ攻め寄せて来るか、不安な世相であり、人心は落付きを失っていたのである。この時に当り、門下に対して一層の確固たる信心を持って、動揺することのないよう呼びかけられていたものと考えられるのである。

文永十一年の作とされている富木氏宛の『聖人知三世事』によると、「日蓮一閻浮提第一聖人也。上自一人二下至三于万民一軽二毀之一加二刀杖一処二流罪一故、梵与レ釈日月四天仰二付隣国一遍二責之一也。（乃至）設作二万折一不レ用二日蓮一必此国今如二壱岐対島一。我弟子仰見レ之。此偏日蓮非二尊貴一。法華経御力依二殊勝一也。⑰」とあって、法華経の行者に対し迫害を加えた罪により、他国侵逼の難が起り、今や我国は壱岐・対島と同様の結果を招くであろうと主張し、前記㋔の文とは対象的に、積極的な力強さを感じさせている。「日蓮一閻浮提第一聖人也」と云う表現は、云うまでもなく〈仏使上行〉としての立場であり、〈仏使〉に迫害を加えた結果として、二難が起ったものであるとしている。

尚、この年は天台の止観について論じられた『立正観抄』がある。「法華止観同異決」とあって、天台宗の学者に対する批判もされている。かくして入山第一年目は終り、身延山における初めての冬を迎えることになるのである。

三　文永十二年

身延入山後初の新年を迎えられた宗祖は、正月廿四日に太田金吾入道に対し、年賀状を送られている。「新春之御慶賀自他幸甚々々」⑱という書き出しで、次に真言・天台の二宗を破している。同じく廿七日には四条金吾殿の女房に宛た御返事があるが、この祖書も真言破であり、法華と真言の行者を比較している。又正月下旬の作と云われている南条氏宛の『春之祝御書』三紙がある。この文永十二年は如上の正月三書を始めとして、十六篇の祖書が著されている。入山第一年目が十五篇であるのに比較すると、ほぼ同数の著作が四カ月間で執筆されたこととなる。⑲

この十六篇のうち、六篇が二月に集中している。即ち二月七日付で、富木殿に「帷一領給候ひ了ぬ。[20]」と御礼状が記されており、仏と比丘との法衣に関する物語が引用されている。「帷一なれども十方の諸天此をしり給ふべし。」と、宗祖は檀越・門弟から送られた物に対しては、たとえそれがわずかな品であっても、心をこめた御礼状が与えられていた。この四紙からなる御返事もその一つと云えよう。

又同日、富木尼へ宛た『可延定業御書』十紙がある。病と業にそれぞれ二種ありとして、法華経を行じて定業を延べた事例を挙げ、「命と申す物は一身第一の珍宝也。一日なりともこれをのぶるならば、千万両の金にもすぎたり。[21]」と述べて、「生命の尊重」を説き、現世に生きることの尊さを強調している。宗祖は『立正安国論』以来、現実の国土を肯定し、現実に「生きる」ことの意義を自覚された。人々が現実を否定し、極楽浄土のみを追い求めようとしていたのに対して、現実の中に生きる力を人々に与えようと努力されたのである。この一文もそうした宗祖の現実に即して仏国土をこの世間の中に建設していこうとすることの現れであったとみなしえよう。

「命は三千大千世界の財にもすぎて候」と云うのは、たんに〈酔生夢死〉の寿命を延ばすと云うのではなく、法華経によって、真に「生きる」ことの意義を把握しえた上でのことであって、「法華経を行じて寿をのぶ」ことに他ならない。

さて二月に入ると、十六日の宗祖の誕生日に故郷から新尼御前が、なつかしい海苔一袋を送り届けてきた。その『御返事』に身延の位置・地形・自然・環境等を、詳しく描写している。それによると駿河の国から、身延の嶺への道程は「百余里に及ぶ、余の道千里よりもわづらはし」[22]と云うから、道中の難渋であることが知れる。又里数については、異論もあろうが、「わづらはしさ」の点から、このように感じられたことであろう。

「㋕古郷の事はるかに思ひわすれて候つるに、今此のあまのりを見候て、よしなき心をもひいでて、愛くつらし」と、赤裸々に望郷の念押さえ難きを述べ、更に、それにつけても「我父母かはらせ給ひけん」と、両親の追憶にふけられ、「なみだをさへがたし」と云う心情を吐露されている。身延山における〈聖者日蓮〉の中の一面たる〈人間日蓮〉の情愛にふれることのできる一文といえよう。しかしこのような表現は、新尼御前という特別の相手であったために、とられたのではないかとも考えられる。「此はさてとどめ候ぬ」とし、以上のことはともかくとして、いよいよ本論に入ることとし「但大尼御前の御本尊の御事おほせつかはされておもひわづらひて候。」と述べ曼陀羅の授与について躊躇されている。それは「領家はいつわりをろかにて或時は信じ、或時はやぶる不定なりしが、日蓮御勘気を蒙りし時すでに法華経をすて給ひき」と云う状態であったからであった。このため「日蓮が重恩の人なれば扶けたてまつらんために、此の御本尊をわたし奉るならば、十羅刹定めて偏頗の法師とをぼしめされなん。又経文のごとく不信の人にわたしまいらせずば、日蓮偏頗はなけれども、尼御前我身のとがをばしらせ給はずしてうらみさせ給はんずらん。」という両面から、「思いわづらいて」おられたものである。

宗祖は在山中に、数多くの御書を記しているが、それと同時に曼陀羅本尊についても、またその多くを書写され、門下に広く授与されている。この曼陀羅もその一つであって、入山初期の染筆によるものである。

この『新尼御前御返事』の文から推して、宗祖は身延入山を決意され、深く期するところがあった反面、佐渡から鎌倉を経て、身延へ入られるに至り、一層望郷の念がその内面において、強く深いものとなっていかれたように考えられるのである。

これは、在山中にしばしば奥之院へ登り、故郷を遙かに拝されたり、西谷から発せられた門下宛の書簡等により、

一層この感を深くすることができる。後年身延を去り、池上へ向われる時も、「日蓮ひとつ志あり。一七日にして返へる様に、安房の国にやりて旧里を見せばやと思ひて、㉓」身延を下山し、武蔵の国へ向かわれたと記されているのであるから、在山の心中には秘かに㋕の文が物語る〈望郷〉の念が、常に底流となっていたであろうと推測される。

尚、㋕の文に先き立って記されている身延の風光については、これも後年、弘安五年八月二十一日の執筆と伝えられている『身延山御書』の前段に示された「身延山之栖」と比較してみたとき、共に身延の環境を、優れた筆致で描き出しており、角度を変え、〈古典文学〉としての立場から見ても、短編ながら鎌倉時代における文学作品を代表するものの一つであると云うことができよう。ただ『新尼御前御返事』の方は、主として身延の位置や里程など、地理的な紹介に重きがあるのに対し、『身延山御書』の方は、専ら身延山の自然美を、韻文の如くに詩いあげているようでもある。

次に二月以降四月までには、最蓮房あての御返事『立正観抄送状』を始めとして、四条氏宛の『瑞相御書』や、曾谷入道宛の書簡、池上足弟に宛た御書等が遺されている。

四　建治元年

文永十二年は四月二十五日に改元されて、建治元年となった。入山して早くも一年近くの月日が流れている。建治の年号に入って最初の祖書は『法蓮鈔』であった。「法蓮」とは、下総の曾谷二郎兵衛尉教信の法名であり、父の十三回忌追善の為の供養を、宗祖に行ったのに対し、末法の法華経の行者を供養する者は、仏を供養することに勝るとも劣らぬものであると歎じている。

宗祖は在山中、時にふれ折りにふれて、常に筆を執られ、特に門下からの送り物や、便りがあった場合は、必ずその『御返事』が記されており、更に門下において「人生問題」の悩みごとや、「教義の解説」及び「信仰相談」等に教示を与えられた『御書』の類、或いは身辺の様子を示された『御消息』の類等、いつも筆をとっておられたことから考えると、在山中は〈執筆生活〉が主たる内容をしめていたとも考えられるであろう。[24] この執筆生活を送るに当っては、やはり心しづかに山林にまじはる必要があったのであり、この身延は入山の第一報に記されている通り「大いしはこの山中心中に叶て候」と云う㋐の文が示している如くの山であったことに相違なく、爾来の執筆生活が順調に進展して行ったものと考えられるのである。しかし、衣食住の生活環境は、㋐の文が示すように、入山の当初は、非常な苦境であったことも、又事実であったろう。この事は身延のみが特にこうした苦境であったと云うのではなく、当時は全国的に災害や飢饉・疫癘のはげしい時期で、特に飢饉は慢性化していたものの如くであった。この点については、同じ鎌倉時代に著された〈古典文学〉の作品中にも、[25] しばしば記述されていることからみても首肯できよう。

建治元年の身延は、ようやく草庵の生活も安定して来て、各地の門下からも送り物が増え、次第に活況を見せ始めていたようである。祖書も『昭和定本』によると、建治元年の四月から十二月に至るまでの御書が、三十篇に及んでいる。その中には、『撰時抄』や『種種御振舞御書』などの主要祖書が含まれている。月平均にすると三篇余の著述と云うことになるが、たんなる「御消息」と異り、主要篇の述作ともなれば、かなりの日時を要したものと思えるので、ほとんど連日にわたっての執筆ではなかったかと考えられるのである。

入山してちょうど一年を迎えた五月には上野殿から「芋の頭」が一駄送られて来た。又同じく五月八日には、一谷入道女房へ一文が寄せられている。「日蓮は日本国の人々の父母ぞかし、主君ぞかし、明師ぞかし。」と主師親の三

徳を示し、更に「又日蓮が弟子となのるとも、日蓮が判を持たざらん者をば御用ひあるべからず。[26]」といましめている点からすると、あるいは当時身延の地から離れた処では、「日蓮の門下」と称する偽者が、廻っていたようにも考えられるであろう。

五月二十五日には、「さじき女房」[27]から、〈かたびら〉が送られて来ている。「ひとつのかたびらなれども法華経の一切の文字の仏にたてまつるべし。」とその功徳の無辺なることを記している。同じくこの月に妙一尼御前からも衣が一つ届けられている。これに対しても鄭重なお礼状が記されている。その中に「仏は平等の慈悲なり」[28]とある。宗祖は〈慈悲〉に関し他の祖書でも示しているが、すべての人々を救済せずにはいられないと云う積極的な大慈大悲に徹して、〈仏使〉の道を進まれたのである。法華経譬喩品の「常修慈心、不惜身命」の文を色読され、[29]後年の『報恩抄』において、「日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。」と述べられるに至っている。

翌六月には『撰時抄』二巻の大作が完成している。「釈子日蓮述」と署名されているが、これは仏使として〈末法の導師〉たる自覚の上に立たれ「只偏に釈迦如来の御神、我身に入りかわせ給ひけるにや、我が身ながらも悦び身にあまる。[30]」と云う立場を表明したものとして、受けとることができよう。

六月には、十六日にはるばる佐渡の国の国府尼御前より、「単位一領」と、「阿仏御房の尼ごぜんよりぜに三百文」等が届けられた。また二十二日には西山殿より、「ささげ、青大豆」が送られて来ている。近くは富士の周辺から、遠くは佐渡の国等から、宗祖の元へは御供養の品々が、引き続いて届けられていった。七月二日に南条氏から、「白麦一俵・小白麦一俵・河のり五でふ」が、同じく二十七日には浄蓮房より「細美帷一つ」が送られて来ている。

ところで、七月十二日付の『高橋入道殿御返事』によると、

「㋕末法に入りなば迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、薬王・観音等のゆづられしところの小乗経・大乗経竝に法華経は文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず。所謂病は重し薬はあさし。其時上行菩薩出現して妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし。其時一切衆生此の菩薩をかたきとせん。[31]

㋗仏の記文すこしもたがわず。日蓮が法華経の行者なる事も疑はず。但し去年かまくらより此ところへにげ入候ひし時、道にて候へば各々にも申すべく候ひしかども申す事もなし。[32]」

とあって、㋕では〈上行出現〉を述べ、㋗では宗祖自身の〈行者〉たることを明らかにし、暗に上行たることをほのめかされていると思えるが、「但し去年鎌倉より此ところへにげ入り候ひし時」とある点について、宗祖の心中に一分の「にげ入り」と云う感慨があったようでもあるが、当時の世間の人々から見れば、三諫が認められないまま、山中に隠棲し「にげ入った」ものとの解釈をする向きが多かったことであろうので、一応仮りにそうした通念にもとずき、㋗のような表現をされたものと考えられる。「日蓮が法華経の行者なる事も疑はず。」と云う強い態度が示されているあとだけに、たんなる敗北感だけで「にげ入った」ものと云う見方は、むしろ皮相の見解として処理されるべきではなかろうか。すでに文永九年の『開目鈔』において、〈法華経の行者〉即ち「仏使上行」としての〈人開顕〉をされた後だけに、「行者たることも疑はず」と云う確信を持っておられたのであるり、むしろ上行としての使命感を持っておられたように、㋕及び全体の文からは感じとれよう。

七月はこの他にも四条金吾氏から「柑子五十・鵞目五貫文」が、高橋氏からは「瓜一籠、ささげひげ、こえだまめねいも、かうのうり」等の野菜類が届き、八月から九月にかけては、「泡消柿、茄子、すず、単衣」等の食物・衣類

が妙心尼や富木氏等から寄せられている。八月四日付の『乙御前御消息』によると、「山中にて共にうえ（餓）死にし候はん。[33]」とあり、入山当時からの飢渇が、未だに続いていることを物語っている。

十一月に入って、富木氏宛に記された『観心本尊得意鈔』によると、「身延山如三知食一冬は風はげしく、ふり積む雪は不レ消。極寒の処にて候間、昼夜の行法も屆うすにては難レ堪辛苦にて候[34]」と云う厳寒の身延が紹介されている。雪なども当時は現在と比べて、はるかに多い降雪量であったように思える。後に弘安三年正月二十七日に秋元太郎兵衛殿宛に記された御書によると、「去年十一月より雪降り積て、改年の正月今に絶ゆる事なし。庵室は七尺、雪は一丈。四壁は氷を壁とし、軒のつららは道場荘厳の瓔珞の玉に似たり。内には雪を米と積む。[35]」とあるのを見ても、いかに身延の雪がこの当時量の多いものであったか知ることができよう。

建治元年、即ち入山二度目の冬は、こうして降る雪深き中に暮れて行ったのである。入山当初の二年間は、以上の祖文から窺えるように、生活環境は極めて苦難に満ちたものであったが、それでも序々に門下檀越の外護を得て、多少の潤が出ていったことが、『御返事』と称する礼状の上から推察することができる。

即ち、この身延山の生活を、「木のもとに、木の葉うちしきたるやうなるすみか」として、「大地を食とし、草木を著ざらんより外は、食もなく衣も絶へぬ[36]」と云う、窮乏の山中として、その実情を記るされながらも、又その反面には、『新尼御前御返事』のように、自然美に富んだ静寂な山として、その景観を紹介しているのである。これはやがて弘安年間に入って来ると、この山は〈霊山浄土〉に勝るとも劣らぬ名山であるとして、「中天竺之鷲峰山を此処に移せる歟。将又漢土の天台山の来れる歟と覚ゆ。[37]」とこの山の勝れたことを叙し、身延を「霊鷲山」として、最も勝れた山であると表明されるに至っている。

本論では、こうした宗祖の心情について、推移のあとを、祖文の上から、特に入山の当初より二カ年間にしぼってその一端を考察してきたのであるが、更に入山三年目以降の動静については、後日を期したいと思う。

【註】

① 昭和定本日蓮聖人遺文　八〇九頁
② 『日蓮聖人の生涯』（塩田義遜著）　一七〇頁
③ 『棲神』第三六号参照
④ 上野殿御返事（昭和定本）　八一九頁
⑤ 『棲神』第三〇号参照。「法華取要抄の研究」　四二頁
⑥ 法華取要抄　八一五頁
⑦ 別当御房御返事　八二八頁
⑧ 異体同心事　八二九頁
⑨ 『日蓮聖人の生涯』（塩田義遜著）　二〇四頁
⑩ 兵衛志殿御返事　一六〇六頁
曾谷殿御返事　一六六四頁
⑪ 『弥源太入道殿御返事』　八三二頁
⑫ 『棲神』第四十一号、「身延山における日蓮聖人の人間的一面」（拙稿）一三一頁参照。
⑬ 主君耳入此法門免与同罪事　八三四頁
⑭ 上野殿御返事　八三七頁
⑮ 南条殿御返事「いかにも今は叶ふまじき世にて候へば、かかる山中にも入りぬるなり。」　一一七六頁
⑯ 顕立正意抄　八四二頁
⑰ 聖人知三世事　八四三頁。この御書は一説によると建治元年の作とも伝えられている。
⑱ 大田殿許御書　八五二頁

⑲ 文永十二年は四月廿五日に改元されているので、文永十二年は四カ月間の短期間となるが、この間に十六篇の祖書が記されているのである。

⑳ 富木殿御返事　八六〇頁

㉑ 可延定業御書　八六二頁

㉒ 新尼御前御返事　八六四頁

㉓ 波木井殿御書　一九三一頁

㉔ 「日蓮聖人の生涯」（塩田義遜著）　一八〇頁

㉕ 鎌倉時代の「東鑑」や「方丈記」等に出づ。「二年が間、飢渇してあさましきこと侍りき」（方丈記）

㉖ 一谷入道御書　九九六頁

㉗ さじき女房御返事　九九八頁

㉘ 妙一尼御前御消息　九九九頁

㉙ 『日蓮聖人研究』（平楽寺刊）の拙稿「日蓮聖人の慈悲」一九九頁及び『印度学仏教学研究』第二十一巻第一号の「常修慈心」六二頁を参照。

㉚ 撰時抄　一〇五四頁

㉛ 高橋入道殿御返事　一〇八四頁

㉜ 同　一〇八七頁

㉝ 乙御前御消息　一一〇二頁

㉞ 観心本尊得意鈔　一一一九頁

㉟ 秋元御書　一七四〇頁

㊱ 法蓮鈔　九五三頁

㊲ 秋元御書　一七三九頁